

山口県産業技術センターの歴史をたどる

－山口県工業試験場－

川村宗弘*, 山本明史*2

The History of Yamaguchi Prefectural Industrial Technology Institute
 -YAMAGUCHI-KEN KOUGYOUSIKENJOU-
 Munehiro Kawamura and Akifumi Yamamoto

1. 緒言

山口県産業技術センターが、平成 11 年(1999 年)宇部市に移転し 22 年経過した。その起源をたどると、明治 35 年(1902 年)柳井市に「山口県染織講習所」(以下、染織講習所)に端を発するといわれる。染織講習所は、「本県染織業の改良発達を図るため、各種試験研究を行い、営業者を指導すると共に、優良従業員を養成する」ことを目的¹⁾に設立された。その後、大正 7 年(1918 年)山口市下堅小路に初めて工業系の公設試として「山口県工業試験場」(以下、工業試験場)が設置され、昭和 42 年(1967 年)までの 49 年間技術支援を行った。今回、そこでの活動等を記録した資料及び写真がいくつか発見されたので、その内容をもとに工業試験場の歴史をたどる。

2. 工業試験場について

2・1 工業試験場の設置

わが国では、明治 33 年(1900 年)に工業試験場官制、翌年府県郡市工業試験場及び府県郡市工業講習所規程が定められ、以降各県に工業試験場が見られるようになった。本県ではこれに準じた染織講習所を明治 35 年(1902 年)設置しているが、工業試験場の設置は遅れた。工業試験場は県の工業の活性化を目的に、商工課を中心に工業試験場の事業計画を策定、大正 7 年(1918 年)3 月に農商務省に申請・認可を得て、同年 5 月 1 日に山口市下堅小路に設置された(図 1)。設置場所については、候補地として岩国、徳山、

防府、山口、小郡、船木、下関が上がり、決定に苦慮したようであるが、交通・材料(竹木)収集に至便、都市ガスの有無、労働余力などが配慮され、現山口市への設置が決まった²⁾。今回発見された職員任免簿(図 2)によれば、初代場長は、元公立実業学校校長安成一雄氏で、内閣から 5 月 3 日付で山口県工業試験場技師に辞令交付(工業試験場長)された記録が残っている。

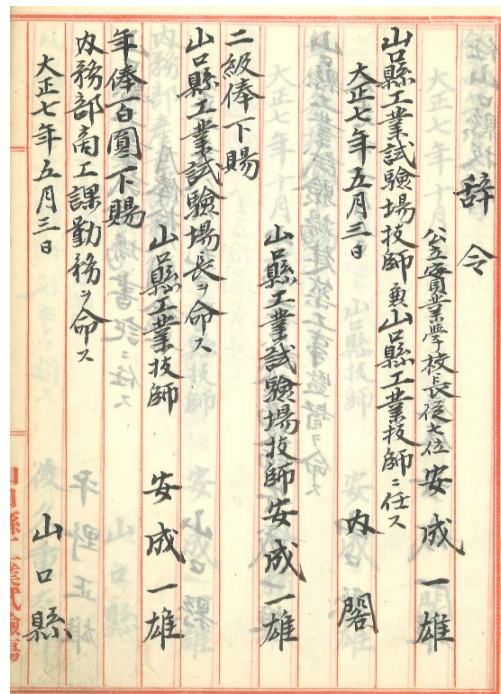


図 2 職員任免簿(一部)



図 1 設立初期の工業試験場(文書館所蔵)

	氏名	在任期間				
		年	自	至		
初代	安成一雄	11	大正7年5月3日	1918	昭和5年2月28日	1930
S5/2/29~S5/7/17						
2	前川 佐一	9	昭和5年7月18日	1930	昭和15年1月20日	1940
S15/1/21~S15/6/24						
3	笠間 與男	5	昭和15年6月25日	1940	昭和20年6月1日	1945
4	仁田脇 建助	9箇月	昭和20年6月1日	1945	昭和21年3月15日	1946
S21/3/16~S21/3/31						
5	矢部 桂 <small>※赴任せず退任</small>	2箇月	昭和21年4月1日	1946	昭和21年5月30日	1946
6	笠間 與男	6箇月	昭和21年6月1日	1946	昭和21年12月1日 <small>※病死(退任日不明)</small>	1946
S21/12/1~S22/5/26						
7	豊田 光男	3	昭和22年5月27日	1947	昭和25年5月1日	1950
S25/5/2~S25/5/31						
8	長岡 清	15	昭和25年6月1日	1950	昭和41年3月31日	1966

※黄色部分は空白期間

図 3 歴代場長

* 山口県産業技術センター理事長

*2 山口県文書館

	名称	分野	設置期間				
			年	自		至	
1	山口県工業試験場	木工、挽物、竹工、漆工、図案、化学 (途中追加: 窯業、製紙、大理石)	23	大正7年5月1日	(1918)	昭和17年3月31日	(1942)
2	山口県工業指導所	時局工業の振興 軍需品の生産増強指導	3	昭和17年4月1日	(1942)	昭和20年5月28日	(1945)
3	山口県戦時製作所	軽車両(荷車)の生産 大衆食器の生産	2箇月	昭和20年5月29日	(1945)	昭和20年8月14日	(1945)
4	山口県立工芸指導所	化学、鉱物金属、意匠設計 木材、竹材	6	昭和20年8月15日	(1945)	昭和27年2月13日	(1952)
5	山口県工業試験場	工芸(木工、竹工、漆工、挽物、意匠設計)、 化学金属	14	昭和27年2月13日	(1952)	昭和41年3月31日	(1966)

※年月日は山口県工業試験場「要覧」(文書館所蔵)による

図4 下堅小路庁舎の名称変遷

設置以降の歴代の場長を図3に、山口市下堅小路の庁舎が、昭和41年に山口県商工指導センターとして山口市朝田へ移転統合されるまでの名称変遷を図4に示す。

なお建物の建築着工は大正7年(1918年)10月、大正8年(1919年)5月竣工、機器類の設置後12月10日に開場式を行った。



(a) 建物外観



(b) 建物内部の様子

図5 竣工当時の試験場の状況
(文書館所蔵)

図5に文書館所蔵の竣工当時の内部写真を示す。(a)は試験場全体像、(b)及び(c)は試験場内部の様子である。図6以降の写真は図11(a)を除き、新たに発見されたものである。図6は後述の新庁舎竣工前の写真で、漆関連の作業所、下部は化学分析を行った作業所と思われる、いずれも小規模な機械装置や技術指導・分析を行っていたことがうかがえる。



(a) 漆工関連と思われる作業



(b) 化学分析関連と思われる実験室

図6 昭和20年代の頃の試験場内の様子

2・2 工業試験場の業務について

設立当初に配布された「業務案内」(絵はがき、文書館蔵)には次のように示されている(漢字等一部現代文に置換)。

■業務案内

- 一 当場は家具、挽物(ひきもの)、漆工(しっこう)、竹細工、蔓細工(つるさいく)等に関する試験製作を致します
- 二 当場は各種製作品に関する図案調製のご依頼に応じます
- 三 当場は申込に応じ巡回講話及び実地指導を致します
- 四 当場は伝習生を入場せしめ3か月乃至(ないし)2か年間の範囲において優良技術者の養成を致します
- 五 当場は木工に関する機械器具の検定を爲(な)し又当場に備え付けある動力器具の貸与を致します
- 六 当場は各種の製作技術に関するご相談に応じ且つ充分便宜をお図りいたします
- 七 当場は醸造及び鉱物その他化学に関する分析鑑定のご依頼に応じます
- 八 当場は執務時間中何時にても喜んで工場参観のご希望に応じます

執務時間 自午前八時 至午後五時
山口県工業試験場

設立時には、木竹工部、図案部、庶務部の3部で組織構成がされ、工業試験場の事業は、この業務案内から木竹製材工業・図案(今のデザインに相当)に関する(1)試作指導、(2)研修、(3)伝習生の受入及び巡回による普及指導などを行っていたことがわかる。

職員は、大正7年(1918年)～昭和41年(1966年)の間、様々な改組・改変が行われているが、山口県職員録などの記録から、ほぼ15人から20人で推移していた。

大正7年の設立当初は、中心となる「師範職工」と呼ばれる職員が、木通蔓細工(あけびつるざいく)、挽物、漆工などの技術を持って青森県、広島県、香川県などから来県し、働いていたことが先述の職員任免簿から読み取れる。図7に建物改築中(昭和26年)の頃の職員写真を示す。

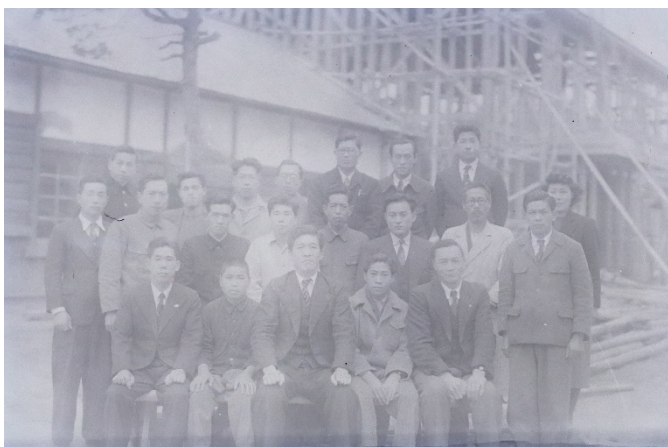


図7 試験場職員の集合写真
(新庁舎竣工途中)

2・2・1 製品の試作業務について

工業試験場では利用者の要望に応じ、製品の試作を行い、製造方法などの指導を行っていた。図8にその製品を示す。参考文献の「山口県政史」にもあるとおり、家庭内の小物や家具など、木工に関する家庭工業を主とする点に特徴があることがわかる。試験場が対象とした事業者は小規模な事業所が多く、製品開発サイクルの期間が短いことが想像できる。そのため、開発した製品のPRを行うため、試験場などで盛んに展示会が行われていたようである。



(a) 木工関連試作品



(b) 家具関連の試作品

図8 試験場で試作された製品

図9は試験場で例年盛大に行われていたと思われる展示会「工試展」の写真を示す(年代不明)。



(a) 工業試験場入口付近
(右手が試験場)



(b) 厩舎敷地内に建てられた看板



(c) 漆器類の展示



(d) 家具類の展示

図9 工試展の様子

2・2・2 研修／研究会の実施

昭和30年代の頃には外部から講師を招いた研修や研究会が盛んにおこなわれていたようで、写真によるとその内容もデザイン、溶接、塗装など多岐にわたっていたようである。図10に研究会等の様子を示す。

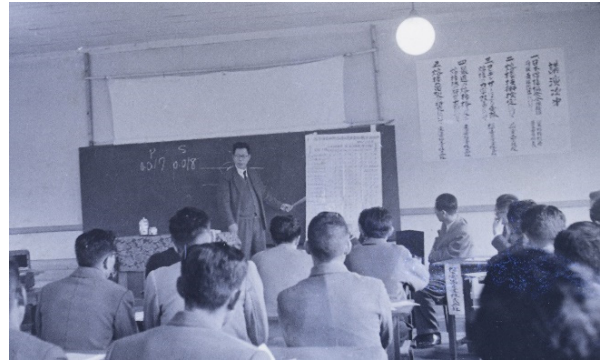
2・2・3 伝習生の受入れ

事業者に対し、技術の伝達を行う伝習は、工業試験場設立当時から行われており、伝習生は家具、挽物、漆工など専門に分かれ3か月から2年の伝習を受けた。

図11に伝習生と職員の集合写真を示す。(a)は文書館所蔵の写真で、(b)は当センターで発見されたものである。2枚の写真によると職員と思われる人物15名程度、伝習生と思われる人物が20名程度で、発見された前後の写真でも同数程度の伝習生が確認できる。伝習生の記録によると、初等教育を受けた若者が多く伝習生として学んでおり、技術の伝承を行う人材教育機関として一定の役割を果たしていたことがわかる。



(a) デザイン関連講習会



(b) 溶接関連の講演会



(c) 塗装関連の研修

図10 講習会・研究会等の様子



(a) 工業試験場設立当初(文書館所蔵)



(b) 昭和 30 年頃(年代不詳)

図 11 伝習生と職員の集合写真



(b) 庁舎正門

図 13 竣工後の庁舎

3. 工業試験場におけるその他特記事項

3・1 工業試験場の新庁舎竣工

大正 8 年(1919 年)に竣工した庁舎も、老朽化が進み、工業試験場要覧³⁾によると 34 年が経過した, 昭和 27 年(1952 年)5 月 22 日に新庁舎の竣工を行った. 図 12 に竣工式の様子を, 図 13 に竣工当時の写真を示す. また, 竣工後の建物レイアウトを図 14 に示す.

要覧によると, 敷地 3,903 m², 建物 1,904 m²の 2 階建て, 鋳物を行う鉄工場, 木材の加工を行う木工機械工場, 竹工室, 挽物室, 2 階には講堂や講習を行う講習室があったことがわかる. また, 国から派遣される場長のために, 場長公舎も敷地内に設置していたようである.

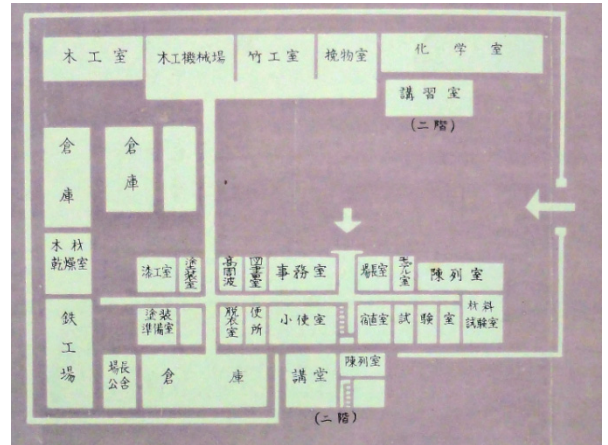
図 14 竣工後の建物レイアウト
(「要覧」(文書館所蔵)から抜粋)

図 12 竣工式の様子



(a) 庁舎外観

3・2 大内塗について

3・2・1 大内塗と工業試験場について

当センターで発見された小冊子「大内塗について」(昭和 40 年 12 月, 山口県工業試験場)によると次のような記述がみられる.

(要約)

大内時代(1358 年~1551 年), 海外や国内との盛んな交流によって山口地方独特の大内塗漆器の技術が完成し, 大内氏滅亡により中絶したものの, 明治 18 年「大内千人挽」が発見されたことによって, 大内塗再興のきっかけとなった. その後大正初期にかけ需要は伸び, 山口後河原地域において漆工約 50 名が集まり技術を競った.

工業試験場が設立されたのもこのころで, 初代場長・安成一雄氏, 二代目場長・前川佐一氏により, 漆工技術の研究, 技術者の養成及び業界の振興が図られた. 工業試験場の陣容も漆工部, 図案部, 木工部, 竹工部, 挽物部に優れた人材がおり, デザイン, 素地, 塗りなど一貫的に優れた研究指導を受け, 試作品が作られて業界の振興に貢献した.

三代目場長・笠間與男氏は, 蒔絵・図案等で優れた技術者で, 前任地が全国でも著名な漆器産地・会津若松の工業試験場長であったが, 戦中でもあり, 業界への振興に充分寄与できなかった.

このように、大内塗と工業試験場の関係は密接な関係にあり、その関係は商工指導センターに移転・統合した後も続いていたようである。

なお、大内塗の代表的な商品である「大内人形」は大正12年頃に工業試験場図案科所属の安藤広吉氏(昭和40年当時所属:成安女子短期大学,現成安造形大学)であるという起案文書(昭和40年12月27日,起案者:長岡清場長)が発見されたが、詳細についてはさらに精査する必要がある。

3・2・2 うるし祭りについて

「大内塗について」によると、戦後、海外輸出による大内塗の増産を目的に昭和21年8月に「内外漆器株式会社」を設立したが、様々な問題により数年で解散した。そのため、大内塗の業界は小規模な事業者に戻った。その後昭和25年8月に漆工技術の改善向上と経営の合理化を目指すため、「大内塗漆器振興会」が設立され、初代会長として長岡清氏(工業試験場長)が就任した。振興会は県内デパートで大内塗漆工展を開催したり、全国うるし祭りに賛同し、山口市内でも工業試験場が中心となって「うるし祭り」を開催したようである。発見された別資料の記録によると「全国うるし祭りに呼応して大内塗の漆祖大内義隆を祭る築山神社において記念祭を行い、その後うるし祭の仮装行列を数年続行し、業界の意気は大いに上がった。」とある。

図15は「うるし祭」のイベントとして、(a)築山神社の記念撮影、(b)市役所前での仮装行列の激励、(c)市内の仮装行列、それぞれの写真で「大内塗について」の記述を裏付けるものである。

4. まとめ

山口県に工業系公設試として初めて山口市に工業試験場が大正7年に誕生して90年近い年月が流れた。現在、山口県産業技術センターは宇部市に新築移転し、当時の様子をうかがい知るものは何も残っていない。そのような中、所内倉庫から古い写真(フィルム)や資料が発見された。主としては工業試験場後期のものが中心であったが、伝習生の記録など初期のものもあり、産業技術センターの歴史を整理するうえで貴重な資料である。

今回すべてについて整理・記述することは出来なかったが、今回の報告をまとめるうえで次のようなことが分かった。

- (1) 工業試験場の当初の対象業者は小規模な家内工業者が中心で伝統産業によるものが中心であった。
- (2) 伝習生を受け入れた技術者を毎年10名以上養成しており、技能の伝習に努めた機関であった。
- (3) 外部講師を招いた研修・研究会も盛んにおこなわれていた。
- (4) 「工試展」など企業の製品を紹介する展示会など盛んにおこなわれていた。
- (5) 職員はおおむね15名程度であり、場長は国の人事によるものであった。



(a) 築山神社(山口市)での記念撮影



(b) 仮装行列前の激励(旧山口市役所前)



(c) 仮装行列(山口市湯田温泉付近)

図15 「うるし祭」のイベントの様子

なお、発見された資料、写真は山口県文書館で整理・保管される予定である。

参考文献

- 1) 山口県:山口県商工要覧, P. 67(1937).
- 2) 山口県:山口県政史, p. 677-679(1971).
- 3) 山口県工業試験場:要覧(発行年不詳, 一般郷土史料 841).